

5 ソシュールの言語論 —ジュネーブ大学の最期の講義と要旨

19 世紀の世界は、イギリスの東洋学者・W・ジョーンズらによるサンスクリットの発見 (1786-1818)、そしてキュヴィエの『比較解剖学講義(全 5 巻)』(1800~05)、ダーウィンの『種の起源』(1859/11/22)が著され、科学実証主義的な思考へと時代は展開し、その到来の中で、言語論もその神学的・形而上学的な呪縛を解かれ、科学的歴史言語学、実証的な比較言語学が興隆し、やっと科学の名に値する学問としてのステイタスを獲得したとされる。その真ただ中で、ジュネーブ大学でのソシュール「一般言語論講義」は行われた。

1. ソシュールの『一般言語論講義』

ソシュールの晩年、最後の講義(1907-1911 年)が下記のように進められ、講義内容は 1916 年に聴講生達のノートから『一般言語学講義』として出版された。しかし出版後 40 年ほど経過した第二次大戦後、ソシュール自身の手稿が次々に発見され、また他の聴講生のノートも出てきて、ジュネーブ大学教授ゴデルによる纏めが 1957 年に活字になっている。さらに 1958 年以降に、ベルヌ大学教授のエングララーによって講義の内容が新たに活字になり、ソシュールの語った講義の内容と『一般言語学講義』との齟齬、あるいは誤解が気付かれ、かくしてソシュールの言語論は重要な解釈上の転換を生じつつ、「実体概念から関係概念へ」とされるギリシャ哲学以来の西欧哲学の伝統の書き換えという転回になっている。「言語論的転回」といわれる現代思想への展開、現代思想の始まりとしてのソシュールの言語論は、レヴィ=ストロースの登場とあいまって、ひろく膾炙するに至っている。

ソシュール以前は、その言語集団内で使用され、時代を経て変化を続けつつ、意味を伝えあい記録される言語および言語使用の総体は、言語(ラング)として包括的に捉えられていたところ、ソシュールは言語(ラング)を三つの術語(概念装置)をもって区別、言語能力(ランゲージュ)、社会の制度(ラング)、個人の言葉(バロール)とする 3つの概念装置をもって言語論を展開する。

1907-1911 年のシュールのジュネーブ大学での「一般言語学講義」の概要

★63 講義 1 (1907/01/16 から、07/03)

言語学とは何かそしてランゲージュとは何かと言う二つの問いのうち、言語学とは何か?と言う問いから、これまでの言語学の批判を、エピステモロジックな方向に沿って行う

- ① 物理音を扱う音声学は言語学の補助的学問に過ぎない
- ② アナロジー(類推)が言語創造の一つの契機と考えて、ラング・バロールの対立を導入、人間の言語を使用する潜在能力(ランゲージュ)の働きとして、この二つが作り作られる永続的な相互依存関係を強調し、

社会的に構築された言語、社会制度としての言語論が展開される。

☆講義 1 の内容：（1907/01/16 から、07/03）

講義 I においてソシュールは、当時の言語論（音声学、進化言語論）への批判を通して『『近代ヨーロッパにおける科学・合理主義の神話』に大きな疑問符」、あるいは 19 世紀的な「自然科学の方法をモデルとして言語現象を見る実証主義的への異議申し立て¹⁾」あるいは、「近代的思考の正当化手続きへの反論」、あるいは「人類の文化的営為の中の哲学と科学の関係の再考」などと評されるに至る、エピステモロジックな言語論を展開する。

言語を使用する個人と社会のあり様について、社会制度としての言語（ラング）、個人の身体活動であり刻々と発語される言語音声（バロール）、そして個人の言語能力、言語使用に係る精神活動（ランゲージュ）として三概念を提示し、言語（ラング）と言語使用総体をこれら三概念の逆説的両義性とする相互関連性をもって説明、時代を超えて使用される言語の構造を、丸山圭三郎の纏めでは「類推による創造」と言うコンテクストで語っている。

類推による創造：言語使用の場での音声変化は、発語者において無意識的であり、その変化は以前の形態が消えて置き換わるのだが、類推的变化、類推による変化（創造）は、主体の意識が介在し、そして以前の項を残しつつ新たな項を生み出すと指摘される。（この事が言語体系の通時、共時の言語体系の変換の誘因として機能する、その言語体系の地質学的歴史の経過が浮かび上がるであろう。）

かつて人間は自然生物性の中にあり、カオスであった外界（宇宙）のなかにあり、外界（宇宙）と彼の指向対象を二項対立の対比関係、差異の関係において（否定的に）括り出すところの言語能力（ランゲージュ）、分節能力を獲得し、そのランゲージュは意味を抱えた音声（音響）イメージ（言語的意味）として、外界（宇宙・アモルフな実質）から彼の指向対象を括り取る心的動態であり、指向対象を世界から文節するとの表現である。言語的意味は、発語者の一つの解釈として表象され、その時にこそ彼の意識もまたカオスから分節される。その意味の単位としての「シーニョ」「シニフィエ（言語音声）」と「シにフィアン（言語的意味）」を一体的に抱えた音声（音響）イメージとして示されている。

そしてラングは個人の意識内部に抱えられており、そのラングを顕在化するバロール（言語音声）であり、双方は共に「社会的事実のそれぞれ異なったアスペクト²⁾」とされ「構成する動きであり構成された状態」として、共に個人の次元において観察される。個人的事実

¹ 丸山圭三郎『ソシュールを読む』P62 岩波セミナーブックス2 2009年3月

² 丸山圭三郎『ソシュールの思想』P274 岩波書店 1989年10月16日

としてのバロール、その集合である言語集団的な社会的事実としてのラングは、あたかも社会制度として、母国語集団内個人の言語表象を規律し、拘束し、心的に規制している。

ソシュールは、この二つ（バロールとラング）が作り作られる永続的な相互依存関係を強調し、社会制度としての言語論を展開する。

★107 講義Ⅱ(1908/11 から 1909/06/24)

二つの序説・ 一つ目の序説一般言語学理論が凝集的に述べられる

(第Ⅲ講との関連性深く、これ以前のソシュールの手稿との関連性もある重要な内容)

1-1 外部から定義された言語の性質：ラング・ランゲージュ・バロールの定義・

記号としての言語、その原理(恣意性とそのコロラリーである示差性・否定性・形相性)

1-2 言語体系の内部から見た言語の性質：言語の「単位」、シーニョ、辞項 言語単位

・話す主体の指向対象、同一性、事象の内的分割、分節言語、

→語る主体の意識が介在する

言語学の内的展開 {内部(主体の意識作用との関連)から見た言語の性質}：12の章立て

純粋価値体系としての言語の体系、(実体の反映ではない、体系内の辞項間の関係)

思想の60(記号学の基本原理「恣意性」・そのコロラリーとしての示差性・否定性・形相性

その下での (言語内単位・同一性・価値の相対性)

二つの言語学・(通時・共時)

共時的領域の区分・類推と連辞・連合関係

通時的領域の区分・偶発的事象の重なり→19世紀的言語論、そのアプローチの否定

二つ目の序説 インド・ヨーロッパ言語学概要

講義Ⅱの内容：(1908/11 から 1909/06/24)

講義Ⅱにおいて、ラングとバロールをめぐる考察は講義Ⅰの視点、『ラングは社会制度である』と言う視点が、価値体系としてのラング、記号学的認識へと掘り下げられる。講義Ⅰにおいては「価値体系としてのラングに触れていない³」と指摘されている。

ソシュールは、まず言語学の対象について、「外部から」の定義として「社会的産物」を、言語の「内的」な把握として、「記号体系」としての言語の「具体的単位」を問うている。

言語の「具体的単位」である「シーニョ」とは、言語音声(シニフィアン)と意味(シニフィエ)の一体化した人間の意識が産みだす心的イメージであって、言語音声のひとつかたまりの中に「表意的な差異」を感じる、その「精神の操作」から導かれ、互いの差異関係によって新たな意味を創出せしむる。「シーニョ」は言語の体系内に置かれて、類推的に意識上

³ 丸山圭三郎『ソシュールの思想』P274 岩波書店 1989年10月16日

で選ばれつつ、意識下で言語の線状性の拘束下で各結合されつつ、そうして形相をなしつつ、「辞項」をもってディスクール（言述）を形成すると言う動態である。

ラング（言語）の使用においては、時空を超えて展開する人間の意識作用・観念作用の自由度である「恣意性」、他方で言語音声発声上の拘束、一筋の時の流れに乗せざるを得ないという「線状性」、この二つの性質の闘ぎあいの中であってディスクールを形成するところから、言語的意味の単位「シーニョ」さえもが、「押しひろげられ打ちひしがれつつ」のバロールの流れにおいて、言語音声と「意味の範囲（価値）」は、「形相」をなしつつ結合されつつ、そのずれが言語的意味を揺らす言語集団的な動きが現れる。それらは言語音素の連なり配列関係と言う記号的構成ゆえに自由、恣意的に捕捉され重なり合いつつ、そのずれ込みが言語の体系全体へと波及しつつ、安定状態に至る言語（ラング）の共時態が示される。こうして共時態としての言語の構造、そして体系内に取り込まれずに終息、消滅する変化を通時態として、人類の言語体系における時間性が示される。

人間の言語使用に係る精神活動は、言語の恣意性と線状性に対応する二つの軸が指摘され、一つはラング内の宝庫とされる格納様態であり、各「シーニョ」をディスクールの要請によって意識上で選択する類推作用に対応する「**連合関係**」である。他方の「**連辞の軸**」は、言語音の発声という身体運動からの要請、言語音声を一筋の時の流れに乗せねばならないという「線状性」に拘束される、意識下で動く「**連辞の軸**」とされる。

この二つの闘ぎあいの内に、記号的単位（シーニョ）は、言語音の発声運動上の難易度、習慣性において、規則性ある「結合価」をもって意識下で「辞項」となしつつ、その連鎖を意識上で類推により選びつつ、ディスクールを形成する。前者の「**連合の軸**」はソシュールによってラングの内的宝庫、「イメージの帯」、「意識の絆」などと表現されており、ラングの格納庫（宝庫）の「群化」のありようと同調する。

講義Ⅱについて丸山圭三郎は「まず最初に言語自体が内蔵する逆説的両義性を語ったソシュールは、ランゲージュ、ラング、バロールの概念を明確にし、次いで言語学を記号学の領域に位置づける。当然ながら言語命名論は否定され、言語記号の恣意性と言う原理の論理的帰結である示差性、否定性、形相性が説かれ、同一性の問題をめぐって単位、関係、価値を決定する言語主体の意識の問題に立ち入り、価値の概念から共時、通時の峻別の必要性が述べられる。続いて言語活動の二つの軸、すなわち顕在的な連辞関係と潜在的な連合関係が、差異化の現象としてとらえられ、「言語には差異化しかない」とひとまずの結論をくださるのである。⁴⁾とまとめている。

⁴⁾ 丸山圭三郎『ソシュールの思想』P60 岩波書店 1989年10月16日

★181 講義Ⅲ (1910/10/28or/29 から 1911/07/04)

記号学の対象である「ラングとは何か」 p 178

1. 諸言語（講義Ⅱの言語体系の外部から定義された言語の性質に対応する内容）
2. 言語（講義Ⅱの言語体系の内部から見た言語の性質（言語学の内的展開）
3. 個人におけることばの能力と行使（未講のまま）

1. 諸言語

（諸言語の多様性、その原因地理的多様性、文字表現・印欧語・セム語族・欧語瞥見）

2. 言語

- ① ランゲージから分離されたラング（ランゲージの持つ二重の性格）
（ラングの定義、(b)30 ラングとバロールの区別、バロールの回路、
記号学におけるラングの位置）
 - ② 言語記号の性質・二重性、二つの原理（恣意性と線状性）、
 - ③ ラングを構成する具体的本質体
聴覚映像と概念の不可分性、言連鎖における単位の主観的確定
 - ④ ラングの抽象的本質体
 - ⑤ 絶対的恣意性と相対的恣意性
動機付けの有無による2つの恣意性、ラング・バロールの区別再考
- ②言語記号の性質の補遺 (1) 1・記号の体系としての言語
2・記号の不易性と可易性
3・静態言語学と歴史言語学(言語学の二重性、区別の必要性)
- ②言語記号の性質の補遺 (2) 静態言語学と史的言語学：言語の二重性
1・区別の必然性
2・静態と動態
- ⑥ 静態言語学
前書きとしての注意、体系の中の辞項としての語：連辞・連合関係
辞項の価値と語の意義・価値の恣意性と表現の恣意性・差異と対立
(思想 135.6 165.6 236) 読む 179 214
- 個人におけることばの能力と行使（未講のままで没）

☆講義Ⅲの内容

最後の講義Ⅲは講義Ⅱと重なる内容、記号としての言語の体系について、講義Ⅱの「具対的単位」を問う所からではなく、言語の「恣意的=非自然的⁵」という原理を軸にして展開をしている。この未完の講義Ⅲを丸山は「①恣意性と必然性 ②線状性と時間 ③否定性

⁵ 丸山圭三郎『ソシュールを読む』P201 岩波セミナーブックス2 2009年3月

(negativite)と実定性 (positivite)」という三つの問題⁶を通してまとめる中で、言語の体系を貫く原理である「恣意性」を軸にして以下のようにまとめている。

①に係わり恣意性の反対概念は必然性ではなく、人為あるいは非自然であり、「現前の事実」「実体性」からの恣意、自由である事を示し、②については言語体系の顕在としての音声（バロール）は、発声の過程において生きとし生けるものの上を一筋に流れ行く時の流れ（線状性）の拘束下にあり、しかしながら人間の意識は自由に時空を超えて恣意に展開するのであり、この二つのせめぎあいの故に、言語表象は「あたかも『現在と言う点』が存在するかのような錯覚を呼ぶ」ラング（言語）の離散性、デジタル性、時空を超えて展開可能な時間性を獲得する。③の否定性とは、言語を発する人間の意識内の、発語者に気付かれた、何だかの差異、差異ゆえの感興を一方に、他方にはそれ以外のすべて（連続体として広がる世界・アモルフナ実態）を置く二項対比（A対非A）において否定的に括り出され、さらに類似する意味との対比関係、差異関係において、否定的に括り出された心的イメージとして浮かび上がる言語の意味を語る。この心的動態をもって発語者の意識に届く、あるいは言語的実体“positivite”としての、言語的意味が語られる。

「自分の意識が分節されると同時に世界が差異化される⁷」という言語の意味生成の現場が焦点化され、言語の意味は、かつて連続的に広がっていた世界から括り出され、あるいは分節された「ランゲージュによる言語外現実の一つの解釈⁸」であり、その括られた意味の範囲というべき言語の価値は、発語者に沸き起こった差異の感興、その心的イメージというべき言語的現実、言語的実定性として、言語の網の目に編み込まれる。

この心的動態を以て実現するところの言語表象、その非自然性は、人間の内的な類推作用の自由な展開のままに、形相となって一筋の糸をなし、バロールを構成する連辞となって、言語音声の組み合わせ、記号的構成なるが故の非実体性を体現して展開する。その自由度、恣意なる構成は、①の問題設定「恣意性」に重なるとの展開である。（ここまでが講義Ⅲ）

⁶ 丸山圭三郎『ソシュールを読む』P179 岩波セミナーブックス2 2009年3月

⁷ 同上 P46

⁸ 同上 P45

要約など・ソシュールの観点について・メモ

イメージの帯 <http://www.arsvi.com/b1900/8107mk.htm> 『ソシュールの思想』 P99

ソシュールの言語論を、言語の社会的構築の視点から読み解く

ソシュールの言語論を読み解く基本的な視点を、レヴィ＝ストロースの人間存在における「自然から文化への移行」に置きながら、この視点を通してソシュールの諸概念の規定における自然生物性と社会文化性を確認し、さらに共時変換に至る言語体系の変換過程について考察する。そしてランゲージュの駆動、バロールの連鎖を進める、人間の精神作用(活動)と身体活動の重層性、相互作用性を確認し、言語の体系性、網の目とされる構造について、人間の自然生物性(発声活動)、身体性からの拘束性(線状性)と言語の恣意性(精神機能・概念化作用)との闘ぎあいを眺め、この闘ぎあいが通時変換、共時変換を引き起こす要因であることを示しながら、地質学的時間性に及ぶ言語体系の社会的構築の過程、人類の言語活動と人類種の形成過程、社会文化状態への移行過程、「自然から文化へ」の足跡の、総体を跡付けたい。

要旨

ランゲージュとは、分節作用とされる人類普遍の言語能力、個人が自らの感興あるいは指向性(A)を、「カオス」とされる宇宙から分節し、言語的意味として括りをとると言う、その心的構成(A対非A)、あるいは差異関係を構成、二項対立的関係として括り出した、言語音声イメージと言語的意味の一体化した言語の単位「シーニョ」を生み出す潜在能力であり、さらにはランゲージュの駆動による一時産物、バロールの生成に係わる活動態、その場とされる。ランゲージュが思考に対して持つ役割は、「思考と音の仲介的場を創る事⁹」との表現がみられる。

そしてラングとは、その言語の意味の単位「シーニョ」の宝庫、個人の記憶の宝庫として「シーニョ」を一定のルールで「群化」して格納し、そして個人の言行為を規律する体系として、人間の内部に抱えられている。この体系は現実の言行為によって顕在する母国語言語として表れる。

言語を駆動する人間の心的な活動としては、連合の軸とされる類推的な思考に係わる軸と、言語音の発声に係わって、時の流れに従って一筋に流れるしかない線状性に従うべく連辞の軸の二つが、ヤコブソンによって指摘されている。この二軸は前者は人間の概念化作用、

⁹ 丸山圭三郎『ソシュールを読む』P43 岩波セミナーブックス2 2009年3月

精神機能に係わる時空を超えて動く類推的活動の軸であり、後者が言語音発声の線状性に従って「シーニョ」を選び、必要な「シーニョ」を選択し結合して「辞項」となし辞項の連鎖を繋いでディスクールとして表象する、その流れの中で機能しており、この二軸とされる。

言語の体系の変換が言語における共時変換、通時変換であり、変換に係わる要因の中の自然生物性と社会文化性が同時に動き合う様態を通して、言語能力に係わる人間の精神機能の二つの軸（連辞と連合）が重なり合って動き合う中で生じる、言語の意味の単位「シーニョ」の結合と選択が進められる場での、「差異の二項対立関係」の揺らぎ、展開の要因について、線状性（自然生物性）と恣意性（社会文化性）の相互の関係の中で、線状性の圧倒的な要請において、連辞の軸の揺らぎが、連合の軸と交差し合って動く、言語表象ではないのか？その重なり、集合としての変換過程が想定できると思われた。

※何故線状性が圧倒的か？恣意性に秩序性、時空間飛翔に限定的な強制をするのでは

「シーニョ」は言語音と意味が一体的につながる言語の意味の単位であり、このシーニョが線状性の要請下で互いに選ばれて辞項を生み出し、バロールの連鎖としてディスクールを形成する過程には、言語の線状性と言う身体活動、発声過程からの制約と、恣意性と言う人間の精神、類推過程の恣意性との闘ぎあいの中で、選び取られるラングの「宝庫」の「シーニョ」は、既にして「群化」された秩序をもって格納されているとされ、この群化の秩序は類推作用、連合の軸によっていると言う。次にシーニョの結合については、線状性の軸によりつつ、同時に動きあう連辞・連合の双方の軸の重なり合う相互的な作用が指摘され、言語は人間の社会文化性の源でありつつ、深く発声における線状性の制約の中で揺らぎつつ変換を引き起こすであろう。

その経過は、人間存在の自然生物性故の、言語の発声運動からの要請の不動な性質を反影して、意味の揺らぎ、結合の揺らぎをひき起こすという、生物身体性からの規定性の影響である事が示されていると思われる。（メモ）